

随泉寺寺報

平成 20 年（2008 年）2 月号 第 450 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺 仏婦講座

講師 浄土寺住職 麻生法樹師

講題 『みほとけに生かされて』

『かぜをひけば せきがでる

さいちが ごほうぎの かぜをひいた

ねんぶつの せきがでる である』 才市

才市さんがある時、お参りした家の講（法座）で、「10 分間念仏を称えましょう」とすすめられ、声高らかに念仏が称え続けられました。才市さんは、独り言のように「借りてまで念仏せえでもな」とつぶやきました。私からお念仏が出るのは、如来さまの大悲が私に届けられた証なのです。

この頃お念仏の声が聞こえないといわれます。お葬式の時にも司会の方が「ご一緒にお念仏申しましょう」と催促の言葉をかけてくださいます。明治の頃、博多の万行寺の七里恒順和上が、高称念仏と言って、大きな声でお念仏を唱えましょうということがありました。その頃の話だと思います。

今は声をかけていただいてもなかなかお念仏の声が聞こえません。

念仏の声が沸き起こってくださればいいのですが・・・。

2 月の法座予定

2 月 7 日 ダーナの実践

2 月 10 日 掃除 上平原

2 月 14 日 昼席午後 1 時より 仏婦講座

2 月 14 日 夜席午後 7 時より 出張法座 上平原 1 集会所

2 月 15 日 朝席午前 10 時より 会員追悼法要 おとき

2 月 15 日 昼席午後 1 時より 仏婦講座

3 月 2 日 午後 6 時より 門信徒会本部役員会



☆第 48 回仏婦講座

2 月 14 日・15 日と第 48 回仏婦講座を開催します。15 日の朝席は物故会員の追悼法要を勤めます。今年は 10 名の方がお浄土に還られました。いづれもなつかしい方々です。生前を偲びながら大切に勤めさせていただきます。



恒松 キヨ子 87 才 平成 19 年 2 月 19 日 佐々木 良江 74 才 平成 19 年 4 月 25 日

宮内 美富子 86 才 平成 19 年 7 月 15 日 内山 泰子 93 才 平成 19 年 7 月 18 日

木村 弘子 98 才 平成 19 年 10 月 2 日 杉田 ヨシエ 92 才 平成 19 年 11 月 21 日

山本 ウメコ 91 才 平成 19 年 11 月 27 日 平原 初枝 87 才 平成 19 年 12 月 9 日

福永 シズエ 92 才 平成 19 年 12 月 15 日 植木 サツエ 95 才 平成 20 年 1 月 9 日

☆ご褒美



ご褒美を出しました。1 月 15 日御正忌報恩講の御満座の後、1 年間よくお参りになられましたという意味合いで、今年一年の聴聞出席表を元に、表彰のバッジをあげました。今年はなんと 3 年間で 100 回を超える出席をしてくださった人が、植木弘子さん、古堀政子さん、太尾田道子さんの 3 名ありました。うれしくて、うれしくて・・・。

はじめてわかりました。ご褒美と言うものは、もらうこともうれしいですが、あげるほうもうれしいものです。よくお参りくださいました。体調の悪いこともあったでしょう。都合の悪いこともあった

でしょう。それを 3 年間、雨の日も、風の日も。

3 年間で休んだのは数回しかなかったのですから、ただただ感激しています。よく頑張りました。おめでとうございます。

☆御礼

永代経懇志 金 参拾萬円 古川 晃之殿 故 古川 精治様 特 永代経志として

永代経懇志 金 拾萬円 杉田 正信殿 故 杉田 ヨシエ様 特 永代経志として

永代経懇志 金 貳拾萬円 平原 鍊一殿 故 平原 初子様 特 永代経志として

永代経懇志 金 拾萬円 中元 須磨子殿 故 灯明田ウメノ様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 杉田 正信殿 故 杉田 ヨシエ様 香典返しとして

門信徒会へ 金 一封 平原 鍊一殿 故 平原 初枝様 香典返しとして

☆御礼

特 懇志 金 貳拾萬円 高部 忠様

特 懇志 金 貳拾萬円 平原 初子様

冬になると 誰にも言わなくても 春の用意をしている いちょうの木

きょう、学校で「めでたくてめでたくてしかたのない袋」をもらった。何がはいっているんだろうと思いながら持って帰ってあけてみた。中には、先生からの手紙と、校長先生の詩と、顔の書きたいちょうの実が二個入っていた。その、いちょうの顔を見ると、思わずわらいだしてしまった。しかし、その笑いも長くはなかった。このいちょうの実をならせたいちょうの木のように、私は、りっぱにしっかり伸びているだろうかと思ったからである。

十二年間、私はどのように伸びてきただろうか。いちょうの木のように、まっすぐに天に向かって伸びてきただろうか、悪い芽は出さなかっただろうか。私は、あまりいちょうの木ようではなかったのではないか。ロビンソン・クルーソーのような精神力も、忍耐力も、勇気もない、根気もない私。どうしてこんなになってしまったんだろう。このにこやかないちょう実の顔をながめっていると「章子、ノビロ、ノビロ、もっとノビロ、自信をもってどんどん進め、反省もたいせつだが、それは前進の力にならねばだめだ。芽を出せ、芽を出せ、すばらしい芽を出せ。そしてその芽をのばせ、うんとうんと伸ばせ」といつてくれているように思えた。そうだ、この実がいつてくれているとおりだ。あの堂々としたいちょうのように、ビクビクしないでがんばろう。冬になると、来春の用意をだれにいわれなくても、あたりまえのことをしているいちょうの木。私も、中学に進む心の用意だけは、きちんとしておきたい。そう思うのといっしょに、このいちょうの実にも新しい芽を出させてやりたいものだと考えた。けれど、私はアパート住まいで、この実を植える土地がない。このいちょうの実を植える場所がない。私は、植えるかわりに、一生、持っていようと思う。悲しくなったとき、苦しくなったとき、悪い芽が出そうになったとき、このにこやかないちょうの実をとり出してながめよう。私の心の守り神として、一生、身につけていよう。

先生、いちょうの実、ほんとうにありがとうございました。

がんばります。力いっぱい、がんばります。(六年・岩田章子)

このほか、「いちょうと競走だ、どっちがほんとうの大木になるか」と、たいせつに育てている子もあります。植えるところのない子は、机の上においたり、腰さげにしたりして「雨にも、風にも、雪にも、嵐にも負けないぞ」とがんばっている子もあります。運動場にでなく、ひとりひとりの子どもの生き方の中に、いちょうが育ちつつあるのです。



☆如月忌（ダーナの日）2月7日 「また来ます」

2月7日は、仏教婦人会活動に力を尽くされた、九條武子夫人の「如月忌」です。明治20（1887）年、第21代明如上人の二女として誕生された武子夫人は、42歳でその生涯を閉じられました。歌人でもある夫人は、18歳から宗門の婦人会の結成に取り組むだけでなく、関東大震災の被災者救援活動や、女子教育、また病院の創設など、お法りにささえられ多くの業績を残されました。

九條武子夫人は、大正12年9月1日に、関東大震災あわれれ、ご自分も被災される中を、支援物資の募材活動や、巡回診療活動など、積極的な救済活動をされ、その無理と過労が、武子夫人の往生を決めてしまうことになったといわれております。

昭和2年の年末、ついに扁桃腺（へんとうせん）炎にかかれ、のどには、化膿（かのう）症状が出ている状況で、ドクターストップをかけられた時も、「ちょっと、荘に行って参ります」と、おっしゃったそうですが、それほど度胸のすわったお方だったようです。昭和3年1月18日に、入院されましたが、それから少しも熱が下がらず、27日には、敗血症と診断されました。

2月5日に、容態悪化と言うことで、意識も混沌とされる状態の中で、お医者さまから「今日が最後かも知れません」と言うことが、ご家族に伝えられました。2月7日に、武子夫人のお兄さまの木辺孝慈さまが、枕辺にお立ちになりますと、武子夫人は、「どうぞ、ご法話をお願いします」とおっしゃったそうです。そこで、孝慈さまは、自分の妹の終焉に対して、「最早やこの世の人としてはおれせねばなりません、どうぞお慈悲にすがって お浄土におまいりなされますように、次に起こすは、還相回向のはたらき、どうか再び娑婆世界に還って、弥陀大悲のおいわれをお伝えなされるやう。 ご開山聖人はご和讃に《安樂浄土にいたるひと 五濁悪世にかへりては 釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）のごとくにて 利益衆生はきはもなし》と仰せられてありますから、あなたもどうぞ、お釈迦様のりになって帰っていられたい。お待ち申しております。」その言葉に対して、瀕死の武子夫人は、「また来ます」と答えられたそうです。



「この妹の、また来ますという所には、大いなる決定心があるものと思いまして 非常に嬉しく私は思いました」とお兄様の孝慈さんは述べておられます。「また来ます」この終焉の応えこそ、武子夫人の信仰生活の結論ではなかったのではないかと思います。

南無阿弥陀仏のお念仏に見守れながら 私たちも「また来ます」と言える 生活でありたいと思います。
- 龍谷 真知子 - 龍谷大学教授 講演より一部抜粋

「大いなる ものの力にひかれゆく わが足あとの おぼつかなしや」 九条武子